

岐阜市立2大学統合方針、両学長に聞く

岐阜市は7月、岐阜薬科大と岐阜市立女子短期大の二つの市立大学を統合し、「岐阜市立大(仮称)」とする新たな方針を示した。2月に策定された基本計画の内容から急展開したとの声もある中、岐阜薬科大の原英彰学長と岐女短の大田康雄学長に考えや新大学への期待について聞いた。

岐阜市立大(仮称) 岐阜薬科大から引き継ぐ薬学部と新設する理系学部からなり、2029年4月の設置を目指す。2月策定の基本計画では岐女短を男女共学、四年制化し33年度をめどに新大学を設立、市公立大学法人が岐阜薬科大とともに運営する「1法人2大学」を想定していた。しかし7月に示した新たな方針では、岐女短を廃止し岐阜薬科大に学部を新設する形で運営は「1法人1大学」となった。岐阜薬科大は29年度利用開始に向け黒野地区に新キャンパスを整備中で、三田洞キャンパスは新学部が使用。オーキッドパーク(同市香蘭)の建物は、新学部のキャンパスに決まれば33年度をめどに早い時期での移転を目指す。

「統合は急な方針転換という声もある。」「同じ自治体に大学が二つあるより一つとなることで、合理的で岐阜市の高等教育への取り組みも分かりやすくなる。新大学の設置認可は厳格化されているが、新学部を設置する形ならハードルも高くないと考える。新たな方針では開設時期を前倒しできる可能性があり、地元で学びたい生徒にとって影響は大きい。選ばれる大学になるために前倒しはメリット。変わり続ける」と生き残れない」

「岐女短が岐阜薬科大に吸収合併される、との印象もある。岐女短のキャンパスを使用せず、三田洞キャンパスを使用する理由は。」「手続上は岐女短が廃止され、岐阜薬科大に新学

「岐阜薬科大と岐女短の統合は急な方針転換という印象だ。」「急きよということではなく、以前から岐阜市と岐阜薬科大との間では将来的な一体化に向けた議論があったが、今回は学生ファーストで決めた。2040年には全国で大学進学者が約30%減少し、一方で理系人材が必要となる見通しを国が示したのを受けて、市と早期に対応すべきと改めた。岐阜薬科大も新しい時代に選ばれる大学にならないければ生き残れない。いろいろな意見もあるがチャンスと捉えている。時代に合わせて変化しないと衰退を招く」

「新大学の可能性は。」「新大学には新設の理系学部データサイエンス系

岐阜市立女子短大 大田康雄学長



「選ばれる大学になるため新大学開設時期の前倒しは大きなメリット」と語る岐阜市立女子短期大の大田康雄学長＝同市一日市場北町、同短大

事業家マインド育てる

部ができるので吸収合併ともいえるが、短大の歴史や精神は新大学に受け継がれ生かされていく。岐阜薬科大に新学部ができる形なので、三田洞キャンパスを活用することは自然な流れ」

「入試に求められる学力には差があるが、新学部の学生のターゲットは。」「短大や女子大を選んで、岐女短も定員割れが続く。新学部は学力中間層がター

ゲットになるのではないかと。県内の高校からも四年制化を求める声があり、愛知などの大学に進学せざるを得なかった岐阜県の高

校生が県内の公立大学を選

「2月の基本計画では、

岐阜薬科大 原英彰学長



「大学も時代に合せて変化しないと衰退を招く」と語る岐阜薬科大の原英彰学長＝岐阜市大学西、同大本部キャンパス

創薬とデータ科学連携

と建築・デザイン系のコースができ、薬学部との共通科目も設置する予定。データサイエンスと創薬の分野は非常に連携しやすい。また、建築やデザインの分野では、例えば薬剤師もこれ

からは在宅の患者の自宅や介護施設に向いていく時代。そこで症状が出る前に患者が過剰な薬の環境や建築についてアドバイスすることがあるかもしれない。『予防的(薬学的)住環境

「一つの大学となり経営の効率化が可能になる。2大学の同じ科目の教員や事務職員の仕事を削減することができる。一方で、教員については互いの特徴を生かして足りないところを補完する形で、できる限り雇用を継続することを検討していく」

「新学部が三田洞キャンパスを使うメリットは。」「学生の収容人数も問題なく、耐震工事も実施済み。男女共学でもあり、施設面の改修も少なく済むと考える。新大学の開学と同時に薬学部は全て黒野地区の新キャンパスへと移るた

め、施設もそのまま使用することが可能」

「新大学では岐阜薬科大の強みや伝統は生かせるのか。大学名が変わることを惜しむ声もある。」「岐阜薬科大は全国から学生が集まり、卒業後は全国や世界へと羽ばたいていく。新大学となっても、世界で通用する人材を輩出していくという考えは変わらない。新学部では、地域に密着し、活躍できる人材を育てたい。薬学部が目指すグローバルと新理系学部が目指すローカルを合わせた『グローバル』の考え方。一つの大学としてバランスの良い形になり、前向きに挑戦していきたい。大学名が変わるさみしさもあるが、将来は新しい姿として定着すると考えている」